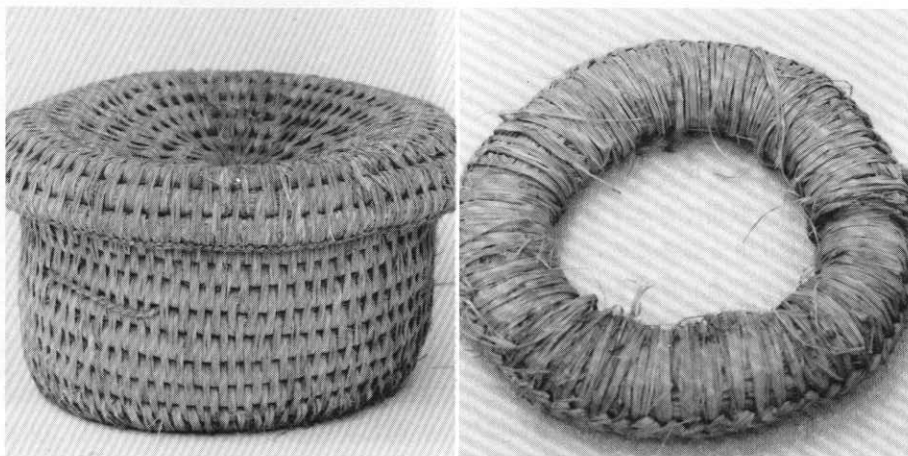


郷土館だより

Vol. VII No. 3

1985. 3. 31



オヒツイレ

ナベシキ

目 次

企画展「ワラと生活」を終って……	1・2
行事報告……	3・4
本陣文書……	5・6・7
その他……	7

企画展「ワラと生活」を終わって

昭和59年度の郷土館企画展として「ワラと生活」をオープンしたのは、年もおしつまった去年の12月20日のことであった。月日の過ぎるのは早いもので、あれから2カ月半が経ち、会期終了の3月10日をむかえてしまった。この企画展が開催していた時期は、当館の在る市立公園に来られる人々のもっとも少ない時にもあたり、主催者としても、入館者状況を大変気にしながらの展示企画であった。また、本主題である「ワラ」が、現代感覚の中で余りにも素朴な素材でありはしないか、など、心配のタネは尽きなかった。

しかし、そんな悩みのあれこれを乗り越えて、とにかく企画展は無事終了した。反省の意味をこめて、企画展終了の報告としたい。

「ワラと生活」開催主旨

日本民族は米を主食とする民族である。米の生産過程で、副産物として収穫できるワラを、祖先達が何かの形で利用しようと試みたのは自然のなりゆきであったと考えられる。ワラの持つ繊維性、保温性、やわらかさ等の性質はもとより、何よりも有難いのは毎年決って大量に生産される身近な原材料であった。利用の始まりは1500年位前のことであろうと推測されている。以後日本民族に「ワラの文化」の展開を見ることになる。ワラは、日本人の生活のあらゆる方面に実に密接に入り込んできた。特に衣食住におけるワラ利用は多く、ワラの作りものは日本民族独特の伝統工芸の美しさすら感じさせるものとなってきた。雪深い地方のワラのはきものヤヅウリ、ムシロ等に見られる編み目模様の美しさなどは、現代人のわれわれにも、何かほっとする暖かいものを感じさせてくれるものだった。

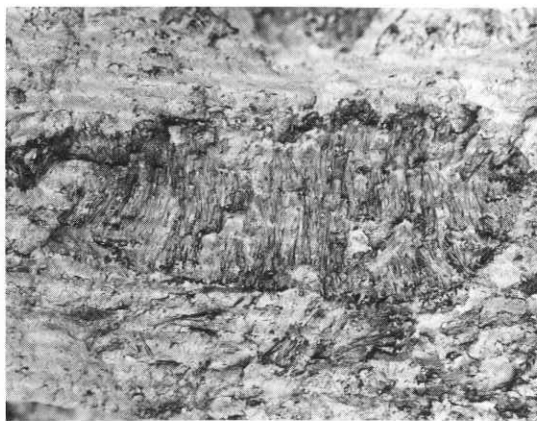
こうした「ワラの文化」の展開が、ごく近い過去の時代まであったことを記憶している人は多い。ワラのある風景やワラの匂いは、誰もが子供時代の昔を思い起す故郷の絵として脳裏に焼き付いている。今、日本のワラ利用の現況は昔を偲ぶよすがも無い。かつてはワラで賄われていた製品は、殆んどビニール等の化学素材に代り、田圃のワラは作業能率の犠牲となってコンバインで切りきざまれている。このような状況下、今ワラを再考することは、ただ昔を懐しむだけでなく、現在われ

われが享受している「現文化」をも問い直すことになりはしないだろうか。本企画展開催の主旨は以上のような考えに基づいたものである。

目玉となった展示品

日本最古のワラジ

展示ケースの先頭を飾ったものは、焼津市宮之越遺跡出土の日本最古のワラジだった。一見すると黒光りした土のかたまりに見えるが、よく見ればワラの編み目がくっきりと浮んでいるのがわかる。1500年程前のもので推定されている。稲の収穫方が穂刈りから根刈りになったのもこの頃だと考えられる。鉄鎌の発明時期とも関連がある、ワラの文化の基本資料となる出土品である。



雨乞いの龍

展示場の中央には長さ6メートルの龍を置いた。三島市三ツ谷新田（箱根西坂）で復原採集した雨乞い民俗のワラの龍であった。雨乞い民俗については先号に記したので省略するが、本展示品中で最長最大の展示品となった。これを復原するに当り、丸1日の労力を提供してくれた三ツ谷の老人会の方々に、深く感謝申し上げたい。



チャンチャンコチャンのワラ人形

ワラ人形の民俗は、全国的にもかなり多い。本展示では浜名郡新居町のワラ人形3点を展示した。新居町の大倉戸、内山、松山の3地区のものである。いずれも事八日の行事に作られる民俗祭具のワラ人形で、厄払いの役目を果す。12月8日と2月8日がその日に当り、松山地区などはテクノボウと言われるワラ人形を担いで、子供らの「チャンチャンコチャン」のはやしと共に村を回るといふ。内山のワラ人形は男女2体を作る。男神は巨大な男根を露出した極端に性的な人形である。厄払いと性という取り合せは、民俗学的にも興味ある問題とされている。



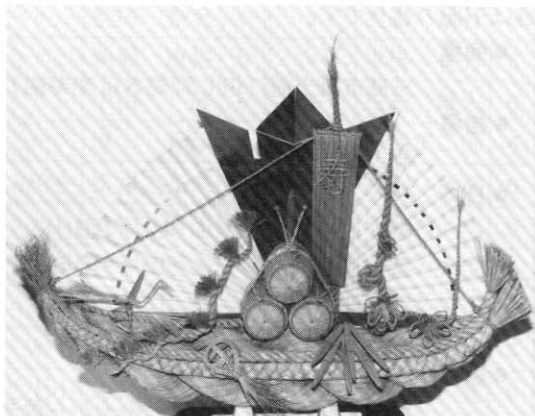
葬儀の籠

三島市周辺には葬儀の時にワラで籠を作り、竹にしばり付けて墓地に立てる習俗がある。昔は登り籠と下り籠の2匹を作ったと聞かすが、今では簡単な籠1匹で済ましている。それでもワラ細工の得意な老人の居る所では、手のこんだ工芸的な籠を作る所もあるようだ。籠による厄払いの意味があると聞いた。



宝舟

正月飾り用に宝舟を作るのは静岡に多く見られる。歴史的にはそう古くはない習慣であろう。しかし精巧で、手のこんだワラの美しさは、宝舟で極致の美を發揮する。今回の展示には、天城湯ヶ島町、葦山町などから数点の出品をいただいた。



入館者の感想から

素材が素朴であり過ぎはしないか、という心配からしばしば入館者に混じって展示室を回ってみました。入館者から聞こえてくる感想の第1番は、やはり「なつかしい」の声であった。しかし展示室を一巡して年中行事とワラのコーナーに来ると、珍しいワラ工品に目を見張ってしてくれた。注連縄や正月飾りに見られるように、ワラが祭具の素材として頻繁に使用されるのは、日本民族が稲の民族だからである。入館者にはこうした事が解ってもらえたものと思う。(杉村)

会期中の入館者数

昭和59年12月20日～26日	289人
昭和60年1月3日～31日	2,476人
" 2月1日～28日	3,655人
" 3月1日～10日	1,046人

主な入館者

- 天城湯ヶ島町教育委員会(1月11日)
- 長野県上田市市議会議員(1月28日)
- 県立三島北高校(2月1日、2月22日)
- 三島市谷田老人ホーム(2月26日)
- 横須賀市教育委員会(2月25日)
- 葦山養護学校生徒(2月26日)
- 千葉大学工学部意匠学科大学院生(3月18日)

行事報告 (少年教室—中学生)

縄文土器作り

郷土館少年教室の一講座として、体験学習会「縄文土器作り」を行ないました。日程と学習内容は下記の通りです。

●会場

三島市郷土館 (但し野焼きは楽寿園)

●指導

郷土館学芸員

●日時

第1日目 用土作り 12月1日(土)

第2日目 成形 12月9日(日)

第3日目 研磨 12月22日(土)

第4日目 焼成 1月20日(日)

●結果

計4日間をかけて、ただの土から焼きものを作り上げた。参加者全員が創ることの喜びを知ったようだ。

少年教室参加者

学校	氏名	学年	学校	氏名	学年
錦田中	河野 光伸	1	南 中	原 由美子	1
"	与五沢範高	1	"	下山 真澄	1
"	城所 祥弘	1	"	土屋恵理子	1
"	加納 真	1	"	北嶋 麻紀	1
北上中	小松 政江	1	"	風間 一毅	1
"	坂本 景子	1	"	亀山 慎二	1
"	原 ミミカ	1	"	青島 昌孝	1
"	新井まさき	1	"	三須 貴浩	1
"	芹沢かおり	1	"	中谷 弘幸	1
"	坂井 理子	1	"	斉藤 剛	1
"	原田 真羊	1	"	吉田 昭仁	1
北 中	楠 陽子	1			
"	遠藤 圭	1			
"	脇田 真也	1			
"	野口 真靖	1			

野 焼 き 風 景



行事報告 (少年教室一小学生)

初午幟り作り

郷土館少年教室の一講座として、郷土の年中行事を理解してもらう目的で「初午幟り作り」を行いました。三島周辺の農村地域では、屋敷神としてお祭りしている稲荷神を、毎年2月初午の日に幟りを立てて祝います。教室では、初午の由来や暦の話と共に幟り作りを体験しました。日程と学習内容は下記の通りです。

●日時

昭和60年2月2日(土)

●会場

三島市郷土館

●指導

郷土館学芸員

●結果

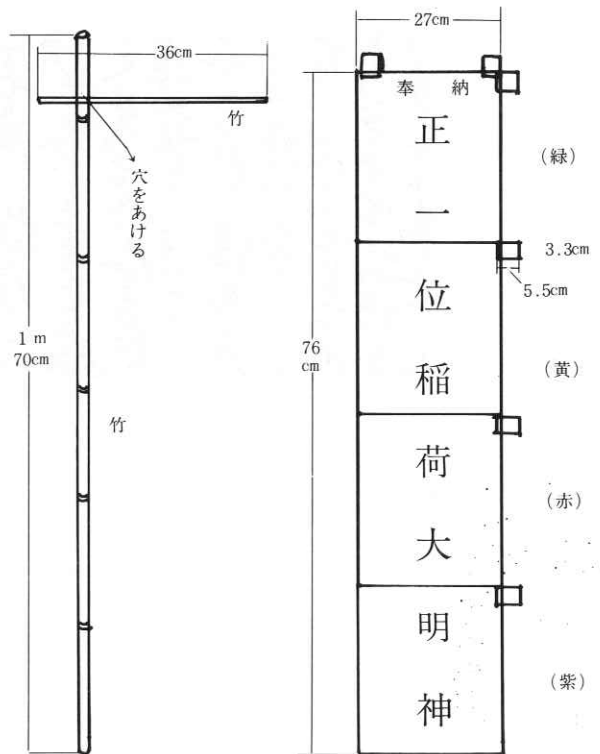
参加生徒全員が「青(緑)黄赤紫」の幟りに、それぞれの思いをこめて完成。

少年教室参加者

学校	氏名	学年	学校	氏名	学年
沢地小	山本かおる	6	北上小	楽々浦寛明	6
"	小沢たか子	6	南小	勝又 祐介	6
東小	前田 真紀	6	"	森本 浩行	6
"	前田 奈美	4	"	渡辺 浩行	6
"	駒形 康裕	6	"	本橋 央行	6
"	中山 静	6	"	三矢 雄太	6
"	原 雅彦	6	"	風間正二郎	6
山田小	松浦 亮太	5	"	金刺 利幸	6
"	武智 優治	6	"	増島 美紀	6
"	長谷川昌久	6	"	増島 弥生	6
"	後藤 英也	6	"	遠藤あすか	6
"	杉浦 宏	6	錦田小	藤井 大地	6
北上小	加藤 俊夫	6	"	室野 寛	6
"	川崎哲之介	6	西小	関 崇	6
"	藤原 貴仁	6	北小	鈴木 健市	6

のぼり作りの順序

- (1) 4色の紙をはりあわせる。
色順(上から)青(緑)→黄→赤→紫
- (2) 文字を書き入れる(あらかじめ古新聞紙などで字を習っておくとよい)
年月日・初午・奉納・正一位稲荷大明神
姓名
- (3) さおに付ける紙を切り、はる。
- (4) さおを作る。
- (5) しあげ(さおに文字を書いたのぼりを付ける。)



三島本陣文書

「御用留」(文久四年)の解説集発行に当って

三島は、東海道五十三宿の中でも、屈指の繁栄を誇った宿場町であった。箱根という交通の難所に隣接していたことが、要因の一つであったと考えられる。街道を往来する多くの旅客や荷物が、日々三島に留まり、そして通過して行った。宿場繁栄は、こうした旅客等の通過量に負うところが大きかったのである。三島宿繁栄の屋台骨を支えていたのは、本陣であり多くのはたごであった。三島宿には2軒の本陣と3軒の脇本陣があり、公家、大名、幕府役人、諸藩役人の街道往復の御用を務めていた。その交通量は、後世の我々の想像を越えて、頻繁であり、それをさばくことは本陣にとって複雑で重要な任務となっていた。

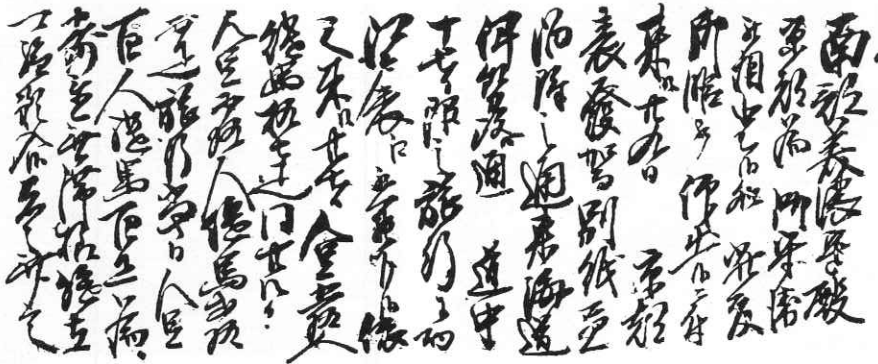
さて、この度三島市郷土館では「三島宿本陣家史料集(1)」として、文久四年の御用留を解説出版

することになった。本書の原本となった文書は、三島宿二本陣の一軒、樋口本陣家(現・三島市南本町、樋口正智氏)に遺されていた膨大な文書の中の一点である。樋口家本陣文書は、その一部が昭和45年に三島市文化財として指定を受けている。本書はこうした文化財指定、そして昭和58年度の「樋口家本陣目録」の出版(当館刊)等の仕事の継続として刊行したものである。

尚、原文書の解説には、「郷土館三島古文書会」の会員諸氏が当り、当館が編集に当たった。

刊行にあたり、その一部を本号で紹介したい。近世街道史料として、多くのみな様にご利用いただけたら幸いです。

- (1)書名 「三島宿本陣家史料集(1)」
文久四年御用留
- (2)編集発行三島市教育委員会・三島市郷土館
- (3)頒価 (未定)
- (4)規格 B5判・横開・函入 200ページ
- (5)問い合わせ TEL 0559-71-8228(三島市郷土館)



- 南部美濃守殿
- 京都為御守衛
- 被相登候処此度
- 御暇被仰出候二付
- 来ル廿九日京都
- 表發駕別紙昼
- 泊附之通東海道
- 伊勢路通道中
- 十七日限之旅行に而
- 江戸表江被罷下候依
- 之来ル廿七日人足五拾人
- 継馬拾七疋同廿八日
- 人足五拾人継馬式拾
- 五疋旅行当日人足
- 百人継馬百疋為
- 寄置無滞様継立
- 可給頼入候恐々謹言

盛岡

川村壽助

三月号 秀富

齊藤兵左衛門

清道

久慈門太

安定

此所宿問屋名連印

此所宿問屋名連印
御心旅り為り金更
二而は致不足候間人足三
拾三人者相對雇ヲ以為
寄置繼立可給是又頼
入候尤當節省略中二付
於道中都而進物等致
心配儀堅及御断候間此
段茂御心得置可給候

盛岡

川村壽助

十二月廿五日

秀富 (花押)

齊藤兵左衛門

清道 (花押)

久慈門太

安定 (花押)

此所宿問屋名連印

猶以旅行当日人足百人

二而は致不足候間人足三

拾三人者相對雇ヲ以為

寄置繼立可給是又頼

入候尤當節省略中二付

於道中都而進物等致

心配儀堅及御断候間此

段茂御心得置可給候

以上

十七日限昼泊所

大津泊 御本陣

草津登 田中九藏

水口泊 鶴飼傳左衛門

坂ノ下登 大竹傳左衛門

龜山泊 樋口太郎兵衛

四日市登 黒川彦兵衛

桑名泊 大塚与六郎

佐谷登 加藤五左衛門

宮泊 南部新五左衛門

池鯉鮒登 永田清兵衛

同 同

藤川泊 森川泊 森川久左衛門

同 同

吉田登 中西与右衛門

以上

十七日限昼泊所

大津泊 御本陣

草津登 田中九藏

水口泊 鶴飼傳左衛門

坂ノ下登 大竹傳左衛門

龜山泊 樋口太郎兵衛

四日市登 黒川彦兵衛

桑名泊 大塚与六郎

佐谷登 加藤五左衛門

宮泊 南部新五左衛門

池鯉鮒登 永田清兵衛

同 同

藤川泊 森川泊 森川久左衛門

同 同

吉田登 中西与右衛門

同 同

白須賀泊 大村庄左衛門
 濱松登 川口次郎兵衛
 見付泊 神谷三郎右衛門
 掛川登 沢野弥三右衛門
 島田泊 置塩藤四郎
 岡部登 内野九兵衛
 府中泊 望月次右衛門
 久能山登 徳音院
 江尻泊 寺尾与右衛門
 由比登 岩邊郷右衛門
 吉原泊 長谷川八郎兵衛
 原登 渡辺平左衛門
 三島泊 樋口傳左衛門
 箱根登 古間佐五右衛門

白須賀泊 同 大村庄左衛門
 濱松登 同 川口次郎兵衛
 見付泊 同 神谷三郎右衛門
 掛川登 同 沢野弥三右衛門
 島田泊 同 置塩藤四郎
 岡部登 同 内野九兵衛
 府中泊 同 望月次右衛門
 久能山登 同 徳音院
 江尻泊 同 寺尾与右衛門
 由比登 同 岩邊郷右衛門
 吉原泊 同 長谷川八郎兵衛
 原登 同 渡辺平左衛門
 三島泊 同 樋口傳左衛門
 箱根登 同 古間佐五右衛門

利用案内

休館日 毎月第1月曜・12月27日～1月2日
 開館時間 午前9時～午後4時30分
 入場無料 (但し、楽寿園入園の際、有料)

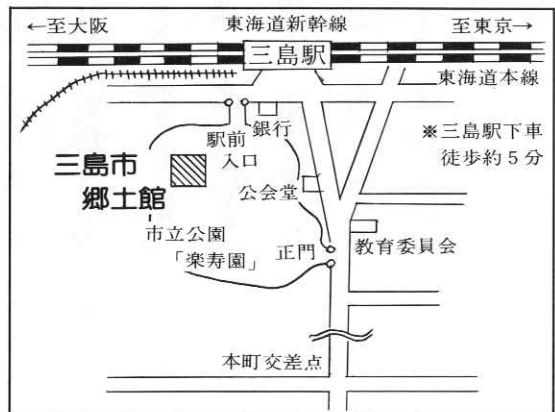
表紙写真解説

オヒツイレとナベシキ

ワラ製品は、家庭の台所まで入りこんでいました。ナベシキとオヒツイレです。これを見て「なつかしい」と言う人を何人も見かけました。ごく最近まで使用されていたものでした。特にオヒツイレは、ワラの保温性という特質を生かして、現代のジャーの役目を果たしたものです。暖かいごはんを食べるための道具です。

編集後記

月日の経つのは早いもので、郷土館の昭和59年度事業も終りを告げようとしています。当館の在る楽寿園の桜のつばみも、もうふくらんでいます。案外ご存知でない方が多いのだが、楽寿園の桜もなかなか見事なものです。ご家族そろって桜見物にお出かけ下さい。(杉村)



郷土館だより No.21

昭和60年3月31日発行

(年3回発行)

編集 三島市郷土館
 住所 〒411 三島市一番町19-3
 TEL 0559-71-8228
 発行 三島市教育委員会